科目区分：教科及び教科の指導法に関する科目（中学校）
授業科目名：書写書道概説
登録学生数：47 名

「書写書道概説」授業報告

国語教育講座・書写書道　東　賢司

１．共通開設の影響

本科目は、中学校国語の免許を取得するための必修科目である。学年は 3 年次生としている。受講生は 50 名弱いるが、中学校教員養成国語の学生は 4,5 名、特別支援教育コースの国語免許を主とする学生は１，２名であるため、大半がそれ以外の所属の学生、即ち、小学校サブコースを中心とする文系の学生が多い。この状況は、国語科教育法でも見られる状態である。また、小中の共通開設の影響であると思われるが、受講生は年々増加の傾向にある。教員免許を複数取得することは県教委の要請を受けた学部の方針であり、望ましいことであるが、受講を無断でやめるなど、従来見られなかった状態も増えている。時間外の学習の時間を確保しているとは言いがたい者もいる。

共通開設は、小学校と中学校免許の垣根を低くし、単位数を減らして免許を取得できる制度であるが、功罪はあるように思われる。

２．担当回の授業の実際

①授業について

昨年度の授業で、多くの学生が「不合格」になったため、本年度は、前期に 4 年生以上のクラスを設けた。また、書写の基軸である毛筆を忌避する傾向が強いため、これらは自宅で行わせ、評価の対象にはしないことを決めた。実際に毛筆学習をしている学生もいるが、それは少数派であり、大多数は毛筆の練習はしていないと思われる。

実技の代替として設けたのは、指導要領に記載される「文字文化」に対する理解である。指導要領の中に入れられたのは、初めてであるが、既に教科書ではこの文化理解に関する内容がかなり増えてきており、以前の手書き文字を並べて編集するというスタイルは少なくなってきた。しかし、「文化」を知ることは簡単ではなく、特に文字文化を形成してきた文化の実物、例えば、古都に行って文字を探すことや、古い手書きの資料を見ることは、地方大学の学生は機会が限られ、学習の動機付けや学習意欲の向上がとても難しい。ある意味、学生の希望を無視しながら進めてきたきらいはあるが、講義内容は以下のとおりである。

第１回：常用漢字の変遷と筆順指導の背景
第２回：書写書道の専門的用語について、日本の旧字体、中国の文字
第３回：毛筆教科書の変遷
第４回：姿勢・執筆法・腕法・鉛筆の持ち方と楷書の基本点画について
第５回：漢字の外形について
第６回：行書の特徴について
第７回：日本の古い漢字
第８回：文字の始祖　篆書以前の文字
第９回：表意を残す漢字－篆書・隷書－
第１０回：中学校で学ぶ書体の本来の姿－行書・草書－
第１１回：現代に繋がる文字－楷書－
第１２回：書と文化－歴史上の書を残す方法
第１３回：学習内容の補足説明
第１４回：デモテスト
第１５回：期末テスト

時間外学習や到達目標については省略するが、時間外学習を含め、一般的包括的な内容を満たすことを目指した。

学生の現状についていくつか補足をしたい。最近、教育実習などで授業参観をすると、常用漢字（学年別漢字配当表の漢字）の範囲を理解していないと思われる指導に出くわすことが増えている。本来は、初等国語と初等国語科教育法で行うべき学習内容と思われるが、この 2 科目はいずれも 130 ～ 180 名の大人数の講義であり、個別に指導することは不可能である。全体では「常用漢字の筆順は板書等

で目立つので間違えないように確認をしておくように」と注意をしているが、「筆順テスト」によって確認をしてみると、ほぼ時間を割いて学習をしているとは思えない受講生が増えているのが実際である。

2点目に指導要領と教科書についてである。戦後、毛筆学習は学習が禁止され、復活には先人の涙ぐましいほどの努力があった。結果、現在の形になっているが、時間的な問題や、国語の中に書写が必要であるのかというそもそも論がいつの時期にもある。結果、記憶に新しい、奈良教育大学附属小学校で起こった、書写の未履修のようなことが起こっている。大学と附属学校の対話不足のようなことが指摘されているが、未履修問題はこの学校だけのことではなく、およそ 10 年に1回は表面化しており、国公私立を問わず、常体化していると捉えた方がよい。前回は世界史の未履修問題と同じ時期に起こったので、補講の措置などが取られたが、今回はどうなるかと注目をしている。

指導要領の歴史を説明し、「内容の取扱い」に記載される時間数などを説明すると同時に、この未履修問題を取り上げ、「もし未履修がばれたら、大変大きな問題になる」ということを呼びかけた。しかし、時間を正確に守っている学校はおそらく数えるほどしかなく、焼け石に水の状況を抜け出すのは厳しい。学生達だけが板挟みにならないことを祈るばかりである。

3点目が、文字文化についてである。日本の独特の文化として「仮名文字」がある。古典文学等でおなじみであるが、古典文学の学習は、中高のときから活字によって学習をしているために、手書きの文字、碑版法帖、木版等の非活字へのなじみが皆無に近い。手書きの文字への「近さ」は書写の学習では相当に重要な要素であるために、この手書き文字について説明をすることに苦心した。また、日本語・日本文化は漢字と仮名によって構成されており、表向きの文化では漢字が主体とされることが多いため、どうしても漢字に触れざるを得ない。しかも、歴史的には、漢字は日本外から来たものであり、漢字の方が使用された期間はずっと長いためにそれらに触れる必要があるが、ここの理解には種々の知識が必要であり、書体の歴史の理解には、相当の時間がかかった。受講生もここの部分の学習については相当に頑張ったと感じている

②小テスト、期末テストについて

現在担当をしている、初等国語科教育法や中等の国語科教育法においても、毎回の授業の振り返りレポートで、生成 AI を使用したと疑われる文書をしばしば見かける。大学の現在の体制では不正行為とは言えないが、国語のような文系の社会的な必要性が十分に担保されていない科目では、いずれ自分の首を絞めることになると伝えているが、受講生 50 名の中で、卒業後に国語の教師になる者はごく少数であり、響いていないと感じる。実際に、オムニバスで担当をしている他の教員からは、授業中に話したこととは真逆の記載、おそらく自分で作った文書ではないと思われるものが提出されていると側聞している。おそらく、これらはなくなることはないであろう。昨年度からそれを予想していたので、さほどの驚きはなかったが、自分の担当の授業では、生成 AI で作れるような課題は出さないことを目標として、昨年度から、非文書課題による評価を行うための準備を進めてきた。それ以外に、昨年度発生した事案として、毛筆の二度書き問題もあり、自分の常識とはかけ離れた行為が日常的に行われていることも経験している。

今年度の授業では、初回と最終回を除く 13 回の冒頭に小テストを行い、代筆をしなければ不正がしにくい形にした。また、最終テストも、高校の歴史の授業のような内容だが、不正は起こりにくい形を整えた。真面目にコツコツと学習をしている学生は高得点を得、授業を欠席しがちな学生は点数が出にくい状況がはっきり現れた。これで一般的包括的な内容を含んでいるかは判断が分かれるだろうが、現状ではやむを得ないと考えている。

課題

受講生からは「問題が難しい」「授業中に使用するスライドを配って欲しい」等、種々の要望が寄せられた。学習の方法としては、キーワードさえメモをしておけば、現代のインターネット社会では授業以上の情報を得ることができる。使うなと言っている生成 AI は使い、推奨する情報検索は行わないということは二律背反すると言って、時間外学習を促している。 2024.02.22 記